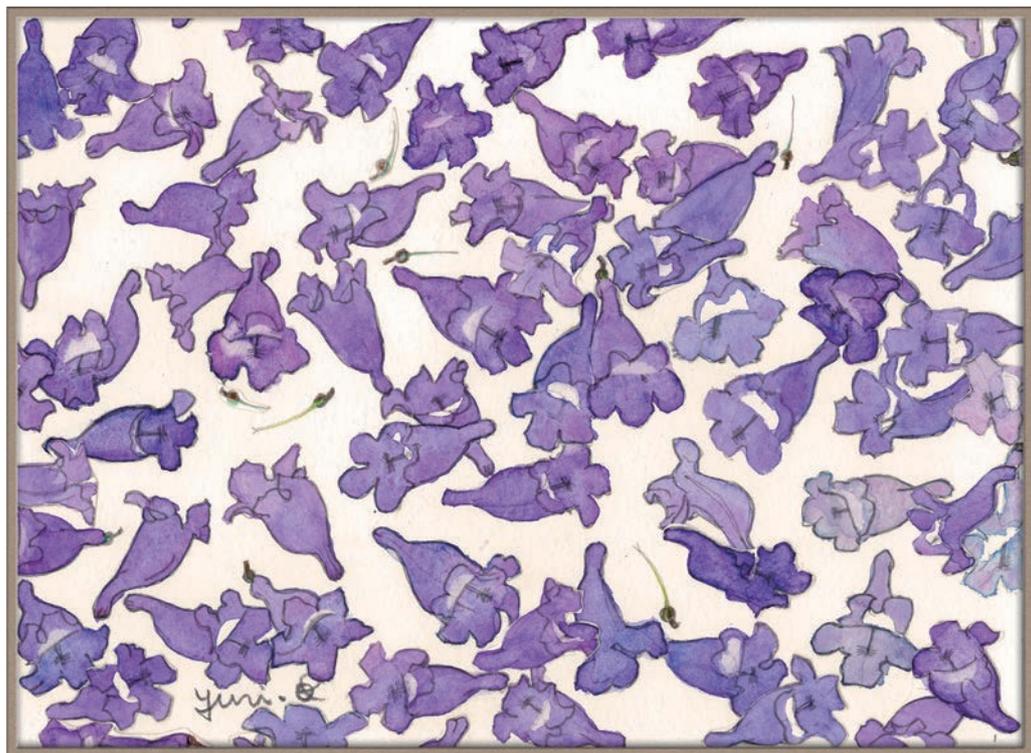


三河アララギ

平成二十八年

九月号

第六十三卷 第九号



ニューヨーク日記(119) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

ÎLE SAINT - HONORAT

Blue Shoe Diaries



カンヌからフェリーで20分くらいの所にある小さな島、サントノラ島、古くから修道院があって島の住民はみんな修道士達らしい。その修道院でワインが作られていて島の唯一のレストランで海を眺めながら味わえるのだ。フランスなのになんかカリフォルニアワインっぽい味でした。カンヌとは違ってと〜っても落ち着いた場所。今度はピクニック持って来たいかも!居る間に雨が降ったんだけどこんな所だとそれも奇麗で気持ちいい。海に落ちる雨って魅しくない?

Île Saint-Honorat is a small island 20 minutes from Cannes by ferry where there's an old monastery. I think only monks live on the island? It's such stark contrast to Cannes, the island is so calm and peaceful. The monks make wine on this island and there is a nice restaurant (also run by monks) where you can enjoy the wine with a nice view of the ocean and yachts passing by. This was perfect for a mellow lunch on vacation! The island is full of beautiful nooks perfect for a picnic, I think I know what to do next time I'm in this neighborhood! On the way back, it rained. And it was beautiful! I normally don't like rain, but it was just so hypnotizing. It pays to get away from the city some times!

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

ときじくの木の実と熟れていくたびの霜に透れる秋葉ぐみ黄渋し

かかげたる吾が子の凶案の額の下に泪ぬぐひしひとのいくたり

アンデスの雪山こえてかへり来し汝なれの毛皮にわが尻ぬくむ

ひとところ笹の葉うごく庭の奥けさもおなじきこゑのうぐひす

花馬酔木白さびたる房をゆるひとつおくれしひよどりならむ

しろたえの椿の花の黄に凍みて土に落ちたまるわが父の寺

暁のはやくなりつつ眼ざめにはハワイをすぎし洋上の子ら

寒に咲くさくらといひて緋の色の花はうてなとともに落つ

いにしへを知るも知らぬもともに来て残れる巨き松の下かけ

葉がくり垂ることしの第一花われのダチュラをいひて捧げむ

歌集「はゞきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

雀らのこゑのかしまし遠くなりし人をしきりに恋ふる朝あけ

立ちあがるそのをりをりに座布団につまづくものかわが白き足

蔦の葉の青き中より声のして露ふりこぼすは青蛙らしき

カニ草の垂るるあはひより朝顔の茎のびいでて日の方に向く

あかときの明りさし来ぬ性教育即純潔教育の論読み飽きて

池の上を風渡りゆくさわさわと蓮の広葉の裏返りつつ

あたり前のことがすなほに云へぬこと云ひ合ふ中に朝のベル鳴る

動悸打つ乳房の上に掌を組み寝返りを打つ五度六度

空腹にならねば一日喰はず寝るひとり暮しのこの四十年

どちらでもよしと非情に電話きりぬそれより動悸のたかまりやまず

歌集 「草々」

今 泉 米 子

また常の老いの二人の或る夜にローザンヌの地図を披げつ

冬葵の小さき花も閉ざしたり己が齡を忘れておもふ

明るめる窓には月のあるらしき眠りしならむ宵の薬に

生けるしるしと思ふばかりにわが門の黄素馨の花咲き替りつつ

視力少し出でくるらしと伝へ来ぬ咲き重りたる黄素馨そよく

日のぬくみまだ残りゐる皮を剥ぐ今年も夫の掘りし筍

庭を境ふ黒板塀を指さしてあのパレー塀の向かうへゆきたい

竿竹を仰ぎて振るふ高き枝色づきのこる小梅一つに

巨楠の洞に祠を祀りたる村の十字路右へ曲がりぬ

更けし夜の湯殿にわれの居りしとき屋根にとどろく落つる梅の実

ゆうかげぐさ

蒲郡 岡本八千代

ゆうかげの草影慕^{くさかげ}ひてここに侘^わつ心静まる如き朝なり

木槿^{ムクゲ}の花ゆうかげぐさともいふらしき今年の花のま白き花花

朝朝にゆうかげぐさの花の向きそれぞれにして心あるごと

わが書屋へゆくも帰りもま白きの夕影草の前を横^{よぎ}切りて

夕影の五弁の花びらふるへるごと今吹く夏の夕風の中

紫陽花の季すぎたれど漱石の絵ハガキの紫陽花は今もそのまま

ほの冷たき水道の水に口うるほし机に向かふけふの倅はせ

降りだしし雨の音さへ聞こえずに何ごころもなく刻のすぎつつ

やうやうに雨だれの音きこえつつそれもまたよしと墨すりはじむ

何鳥か五羽か六羽か海の方^{かた}雨ふる稻^{いのう}生の灰色のみ空へ

武蔵野

東京 今泉 由利

なだらかに白詰草の咲く丘は弥生古墳の埋もれゐると

白白と白きわだちて半化粧蟲たち人たち集ひ集まる

白い花灰白色の果となりぬエゴノキに過ぐ時と交はる

エゴノ実は白緑色に稔りゐて上向きてゆく武蔵野の道

エゴノ花白く咲く枝織り込みて武蔵野タピース作りし日あり

幾いくつ大輪白花咲きをりて山百合揺らす一陣の風

武蔵野の土器の欠片にかすか見ゆ墨もて筆もて書かれし漢字

富士山の噴火せし日の溶岩よごつごつ積むを神とし崇む

御鷹場に湧き出づる水掬ひあぐまろまるとして真地球の味

父母と同じ気持になりてゐるトロロアオイのトロリと咲きぬ

願ひ

豊川 弓谷 久子

おもざしがその母そつくりはなやかに舞台に踊る今我が姪が
生きゐればさぞ見たからむ弟夫婦はなやぐ娘の晴れの舞台を
裏藪に父剪り呉れし大竹に短冊吊りにき心浮き浮きと

バイトにてみさとも今日は受付けか参院選挙所人まばらなり
叶わぬと知りつつ投ぜむ我が一票婦人候補者の名を書きたい

町並の低き夜空にぽっかりと文月満月浮かびゐる宵
雨上がりの庭に小蛙飛び交える色も形もそら豆に似て

ジユランダの葉にしっかりととまりをり今朝かえりたる蝉の抜け殻
座したまま見仰ぐる空よ百日紅の花高々と只赤赤と

一日でも永く生きてと願ひたりき常臥の夫も認知症の姉も

至福の

豊川 内藤 志げ

藪かげを吹き越す風に去り難しガードレールに両手を置きて
藪を抜け日陰を歩み上野坂吹き上ぐ風に至福のひととき

ひとりの径足許見つつ下り始むひらひらと黒糸トンボ

草を取るわれに声かけ幼な子は今日誕生日とヒラヒラドレス

蔓枯れの西瓜を畑になげおきぬ鳥は甘きを知っているかに

茄子胡瓜ピーマントマトを飯前の涼しき内にと家藪の畑に

雨の日は生地を選びてスタイルを決めし店なり石黒ハギレ屋

五時半を待ちて散歩の日陰の径今年始めて黒糸トンボ

裏窓に雨を眺めり本宮のお山も煙雨に覆ひつくさる

本宮の連峰全て霧の色しばし眺めむ日の暮れ刻に

ふる里の集落

岡崎 林 伊 佐 子

ふる里の廃家並べる集落の時代の変遷を残さむと思ふ

隣り家の屋根のうえにて木の実食ふ野猿はそば茎色の顔する

隣り家のトタンの屋根も錆さびて帰省する時亡き人しのぶ

祖達おやの拓ひらきし棚田も山と化なりわが代の終末さびしく思ふ

歌を詠み老いて安らぐ人生に亡き師の教訓深く係はる

寒狭川を出版してより詠みし歌季節季節の農作業の歌

降る雨は天の恵みぞ久ひさに野菜いきづくわが家の畑

雨あとの野菜の香かうも土の香もわれには親おやしき農民生活

茄子の影トマトの影に身を寄せて暫し休みぬ炎暑の日盛り

草汁の青く汚れし指頭を丹念に洗ひてスーパーに行く

青田風

豊川 安藤 和代

田蛙の声は遠くに澄み通り更けゆく夜をしみじみとおり

三日前草抜きしたる裏庭に早も十薬のつんつん伸びる

肥えづきた青田の上を吹く風を全身に受け歩を速めたり

用水の岸に螢の舞った事話せば孫は「うっそー」と言う

三ヶ月勤め疲れたと背が語る孫にかけやる言葉をさがす

働くことの厳しさ少しはわかりたかまだまだこれから孫よ頑張れ

窓に見る山脈家並み青田風夫は一日を楽しみており

弓張りの山脈に映え鷺が舞う白さがまぶし梅雨明けの朝

時あれば作歌にペンを持つ吾に楽しいのかと夫は問いくる

歌ありて吾の人生楽しけれどんな山坂も歌にて越さん

比べる

大阪 伊藤忠雄

我は我人は人にて気にならぬ世俗離れて暮らす憧れ

雑然と並ぶ街並み浪速筋行き交う舟の昔懐かし

戎橋肥後橋京橋淀屋橋水の都の響き今かて

あの酒屋この呉服屋に喫茶店のれん出ぬまま日が暮れるなり

通り行く人もまばらなアーケード靴音だけがやけに大きく

熱帯びる舌鋒鋭き演説に判定下るはこの日曜日

故郷に揚げた看板陽を受ける激励届けりオの空まで

炎天下誹謗中傷なんのその我は潔癖情熱の人

限界に挑む姿の美しさいつの間にやら忘れ去られる

何ごととも初心忘ることなかれこれぞ真に忘るべからず

希望

東京 足立晴代

両手首捻挫直りてよろこびも束の間となり新たな試練

スイッチに左手をのばし壁伝たいクロール形で見事骨折

高齢と云はれてハット驚きぬ越しかたの日々夢の如くに

猫のよう片手で洗う情なさ鏡にうつるあわれな吾が

齢^{よわい}卒^い寿この坂いかに越えゆかん心新たに指折り数えて

デイケア^{エーゼット}AZでの音楽体操続けた成果リハビリにあり

お隣のベットのの方と話合い歌舞伎の趣味で話はず

入院もあと三日となり過ぎ去りし痛みの日々をなつかしむ

食欲不振無理に食せんと大口開きてお茶で飲みこむ

駄目もとで良いと思いて眼の検査名医に会えて希望の光

十三夜の月

沼津 鈴木孝雄

山梨の果物運んで直販車お婆さんらの声に囲まる

梅雨休み富士山やつと山開き沼津から祝う浜木綿添えて

何処よりたどり着きたる浜木綿の島郷海岸ポツリと咲けり

気象庁の梅雨明け宣言呼応して十三夜の月東に煌く

学習院の遊泳合宿生徒たち隊列組んで声掛け沖に

和舟漕ぎしっかり生徒ガードする学習院の遊泳訓練

熊蜂ラベンダーの花に飛んで来て細い枝揺りまた他の房に

このシーズン初のオクラを収穫す料理を想い思わずつばき

里芋の芽にまで鳥についばまれ嫌々掛ける防鳥ネット

サニーレタスついに上まで伸びつきて遠慮がちに咲く小さな黄花

緑深き

春日井 清澤 範子

緑深き桜並木の影に居るそよ吹く風に衿元ゆるる

学童は交通安全の旗を持つ高学年の女兒に従ふ

雨の予報ありし今朝は色とりどりの傘を広げ持ち登校するなり

青ピンク赤黒黄色と児童らのランドセル事情も変わりにけり

涼しき内に神社に詣で柏手をピーピー鳥に迎えられたり

熱中症になりては困る三十五度吾の散歩またとぎれをり

残り実の南瓜の蔓は延びゐるも成り花の花は一つだになし

吾が家は娘と三人の家族にして誰が居なくても心淋しく

加齢ともなりて安定剤増えてゆく吾の最善頑張り頑張れ

病院へバスに乗るなりバス停は梅の実着くる公園の前

知多半島

豊川 白井 信昭

知多半島北上しつつ見通せり橋に繋がるセントレア見ゆ

51番「野間大坊」の客殿に義朝公の最後の絵解を

50番大御堂寺の両札所境内広々とひと続きにして

50番源義朝公御廟所のすり鉢状に木太刀のあまた

境内の楠の木立を吹き過ぐる緑の風の癒しの空間

マニ堂近く言い伝えの血の池あり草に覆われ静もるなかに

義朝公終焉しゅうえんの地と慕い行く55番の法山寺へと

境内の木立茂れる順路きてほの暗きなか湯殿跡あり

行き帰りこの橋渡り思い切つて長田親子の「磔はりつけの松」へ

家近く鉢に陽を吸い雨を吸いニオイバンマツリ今を盛りと

森羅万象

東京 森岡陽子

解体の看板立ちし庭のすみ泰山木に一輪白花

川上の風受け並ぶ高野槿雀と鳩の緑陰に成る

七夕に幼き頃の夢つなぎベガも応援ソユーズ飛び立つ

北斎の森羅万象漫画展河童に会ったか人魚を見たのか

木道に沿ひて花咲くハンゲシヨウよどみの池に一際に白

初蟬の心もとない鳴き声はまだまだ来たらぬ夏の暑さの

光る汗役者の額にほんのりとシネマ歌舞伎の臨場感なり

日も暮れて大川端の笑月庵風心地良く屋形船通る

三味の音聞へ来るよな柳橋市丸姐さん川開きの夕べ

青々と樹木の茂る真中にて酸素とアロマと一称貰ふ

七夕

名古屋 近藤 映子

七夕の空は曇りて一つの星も見えざる空を見上げて居る

台風一号発生のニュース七月八日夜の雨量は多し

去年食した西瓜の種八つぶの一つの苗は花実つけたり

鉢植の西瓜の苗は延びくくって実花の咲きて小さき実つけぬ

平年より早いつゆ明けその暑さ35℃の猛暑となりぬ

今年の西瓜糖度12度の種蒔きて八本芽を出しその一本を

見降しの緑陰歩道の蟬の声朝より大合唱の始まりぬ

七月の二日開花の西瓜の花は実りて早くも直径八糎なり

日々に育ちぬ鉢植西瓜直径八糎ともなれば西瓜の型

久しぶり息子と孫の来名にも我手動かぬ悲しさよ

報道

蒲郡 杉浦恵美子

我が夫とあの道通りしことがありニースの街にもテロ起きたるか

プロムナード・デザングレのテロ図らずも夫思ひ出づテレビの報道

ああニース夫との旅終着地テロの報道こころえぐらる

我が夫と共に旅せし夏季休暇懐かし些細な諍ひさえも

我が夫と共に旅せし南仏を独り訪ふこと二度とあるまい

然らば我が旅の行く先スタイルも変はりてゆかん足の向くまま

我が家に棲み付く守宮動かない何時もわたしが根負けしたり

この少女何処を学んでゐるかしらついつい後ろを覗いて仕舞ふ

さて我も女子高生と列に並び教へ子出番のライブ開場を待つ

教へ子の転身五年目我もまた夫無きこの世を新たに生きん

初心者マーク

豊川 山口千恵子

知らぬ間に咲きて萎みぬ月下美人花殻三つ朝下がらるる

おしみなき香を放ちつつ月下美人今宵咲きをり遅れ花一つ

夕風に吹かれて田の道一廻り河原田遺跡の標立ちをり

塩をふり紫蘇の葉をもみしんなりす濃き紫色のアク汁出できぬ

アク抜きたる紫蘇を下漬梅の瓶に忽ち梅酢赤く変はり来

ほんのりと赤色付ける梅干しを笊に広ぐる強き陽の下

ジャガ芋の出来のよろしき今年なり大きいものから選びて友に

初心者マーク付し車を運転し姉妹で来たり祖母われのもと

することもなき一日なり縁側に仏具を磨く久しぶりなり

組を朝の光にさらすなりわが住む地方は梅雨明けなりと

目に見えぬモノ

豊川 夏目勝弘

光あるときには闇はなぜ見えぬ猛暑の書斎に思ひの遊び

庭すみに蕾を付けて伸びてくる菊の花色どこでできるや

ネムの木の眠れるところにこの我も早ばや床に横になりゐる

部屋内に雑菌みち満つコマールに恐れ戦くことなどはない

雑菌も必要ありて生きてゐる共に生きようと思へばよろし

目に見えぬモノを何故おそるるや朝のニュースに殺人はやめよ

目に見えぬモノをただに信ずべし両手の雑菌に害されしはなし

目に見えぬモノに戦く人多くして花を付けざるサツキもいやし

青空の青は何故青なのか思ひの遊びのできる今なり

食堂の窓より見ゆるは街を行く通行人の歩く足のみ

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

冬まぢか剪定忙しき庭師より紅き山茶花一枝いたたく

小夜ふけて帰る道々闇の中とおして見ゆる黒のいろいろ

われはいま南国にいてやしの木とバナナの林の中に立たる

町辻に趺坐する釈迦のお堂あり仏の国は花に満ち満ち

山いくつ巡り巡りてまだ続く茶畑の道はてなく続く

どもまでも海は一つにつづけどもここはインド洋と言ひ聞かせ立つ

碧空を斜めに切りてピラミッド巨大なる影サハラに映ず

ピラミッドの茫洋として立つ見ればわが身置く場所ここにもありやと

たわむれの遺跡発掘わが持ちしシャベルの先は五千年前

褐色の砂岩大地は果てしなく生きもの見えすサハラ荒漠

童謡 『かつばがいるよ』

高橋育郎 作詩

水のきれいな 沼がある

そこにはかつばが いるそうな

けれども見た人 いないとき

雨の降る日に 水音が

ぽちゅんと聞こえる かつばかな

まぶしがりの かつばかな

ひるのひなかは 水の底

お日さま背にして おひるねだ

のんびりいくさ あわてない

お皿を落としちゃ いけないよ

夕がた暗く なりました

かつばがひよいと 顔を出す

まんまる月夜に よろこんで

まんてんの星に おおはしゃぎ

おかにあがつて 踊りだす

水音ばかりが 聞こえるが

かつばはどこにも 見えないよ

だれどかつばは いるんだな

きれいな水が すきだから

月とか星が すきだから

「歴代天皇御製歌」(六十二)

貫名海屋資料館

「後小松天皇」第百代・在位一三九二年(十六歳)・一四一一年(三十六歳)

後小松天皇は、北朝第五代の後円融天皇の第一皇子。第九十九代、後亀山天皇から「三種の神器」を譲り受け、正統の皇位を継承。

皇后は九十年ぶりに平安宮となった。

立春

たちかへる神代の春やしるからしたかまがはらに霞たなびく

苗代

なはしろの畔もしどろに行く水のすみもさだめず鳴く蛙かはづかな

月

身をてらす影ともあふぎ憂き事をかこつもおなじ秋の夜の月

杜頭祝言

日とてらし土とかためてこの国を内外の神のまもるひさしき

以上(後小松院御百首和歌)

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

梅雨晴れの草取るさきにアキアカネとびかひてをりしばしながめむ
二葉館に貞奴使ひし文机のひっそりとありゆかしきものよ

山崎 俊子

スカシユリの初咲の一花供へたりはや三度^{みたび}目の秋はめぐり来

「ペースメーカー」入れたよといふ姉さまと虎屋の羊羹向きあひてひととき

三田 美奈子

爺^{じい}の売る店先に並ぶ駄菓子たちさんざん迷ふ小さき手を待つ
その昔役場にありし檻の犬の悲しげな目をば我は怖れき

水野 絹子

雨上がり草取り終へたるわが畑に雑草の芽はや小さき緑
城山の氏神様の祭り近し区民総出の今日は草取り

牧原 規恵

北陸に移り住みつつはや三年孫は福井弁上手になりつつ
老猫とどちらが先に逝くのかと呟きて母の小さくなりて

稲吉 友江

二葉館のガラスケースの中にあり「三河アララギ」昭和二十九年歌誌
あと少し続けやうかとまた思ふオアシスフラのステージに今

鈴木美耶子

かつて夫と行きにし雄々しき熊本城悲しくも地震に遭ひたるらしく
愛宕山地蔵まつりの提灯のゆらりゆらりに孫の名捜す

吉見幸子

「地震です」エリアメールにくり返す案内はなしホテル十四階に
ドーンときてぐわーんと揺れゐる十四階空の中なる東京の地震

牧原正枝

その短き命惜しむか木々渡る灯ともして闇を舞ふ蛍
朝どりのそら豆もらひ塩茹のお多福いろいろ淡緑色

石田文子

十葉にレモンバームに紫蘇ばかりのわが狭庭にも額紫陽花も

吾が植ゑし紫陽花咲けり額の花赤紫に白きも一つ

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

無意識につけてしまったクーラーに夏は終りと言われているよう

慶応義塾志木高等学校一年 鈴木悠斗^{はる と}

初めての三枚おろし魚から溢れ出す血に感じる「命」

千葉市立打瀬中学校二年 松田詩乃^{うた の}

本読めば時間がどんどんすぎていく不思議な力が私を連れさる

流山市東部中学校三年 大石桃子

五輪選手超人類と思っていた次に出るのは自分の世代

芝浦工業大学柏中学校三年 宇川綾香

クラス替え階段上っている僕が抱えているのは荷物と緊張

昭和学院秀英中学校二年 鈴木恵杜^{けい と}

地下深く埋れし葉微生物根を張り咲いたノーベル賞

千葉県立木更津高等学校二年 吉富さくら

尾木ママがテレビで言ってた反抗期あなたのことねと母がつぶやく

西武台千葉高等学校一年 坂田瑠美

二日間連続受賞ノーベル賞努力が実った奇跡の瞬間

千葉商科大学付属高等学校一年 萩原翔平^{しょう へい}

『俳句』

明日開くために閉じゆく蓮の花

今泉由利

まんまるの影伴ひて夏みかん

しばらくは青山椒に痺れゐる

長身の孫に浴衣の帯結ぶ

松本周二

甘酒や老舗の柱黒ずみて

苦瓜の花に五分の実結びをり

白神の櫺に呼び合ふ四十雀

柳田皓一

初蟬のうれしき歳となりにけり

奥入瀬の苔むすなかに滝しぶき

ふるさとや車座に酌む諸焼酎

山元正規

川音を丸ごと使ふ夏料理

夕空へ大き弧を描き水を打つ

朝どりのトマト袋をくもらせて

山迫京子

工事中車の陰の三尺寝

羽広ぐ前の鷺草よく売れて

川開き灯り行き交ふ屋形船

森岡陽子

矢絣の揃ひ浴衣や琴さらひ

仰ぎ見る愛宕神社の夏越の輪

取り終へて滴る汗に浴衣掛け

田中清秀

連峰を流るるごとく氷河かな

四股名染め掛け声受くる大浴衣

亡母の浴衣の似合歳となり

重野善恵

虫干やはらり落ちたる古写真

浴衣着て久しき下駄の鼻緒擦れ

スキップで追いかけてをり夏野原

植村公女

ワンコインランチの列や雲の峰

虹の端に夫ゐるらしき心地あり

茶の花や利休の像を床の上

正岡子規

梅雨晴やところぐに蟻の道

青々と障子にうつるばせを哉

一日の旅おもしろや萩の原

朝顔にわれ恙なきあした哉

山々は萌黄浅黄やほととぎす

五月雨やけふも上野を見てくらす

杉谷や山三方にほととぎす

大空の真つたゞ中やけふの月

かさね吟行会

「東高根森林公園」 七月

米田文彦

梅雨明け宣言はないが夏本番を思わせる一日、川崎市溝の口駅からバスで十分ぐらいの「東高根森林公園」に吟行した。

多摩丘陵の自然豊かな丘陵に広がる自然公園である。昭和四十年代の高度成長時代、ここ川崎市中央部も住宅地開発が盛んだった。その際、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡が発見され、また周囲のシラカシ林は学術価値の高い群落であることも判明した。そのため県はシラカシ林を県指定天然記念物に、遺跡を県指定遺跡として一帯を保全整備し、昭和五十三年に公園としてオープンした。いくつもの林や花の苑、広い芝生広場、湿生植物園などが展開されている。

入っていくとすぐに百日紅が咲いている。「夏の花ではあるが、少し早くはないか」などと話しながら行く。紫陽花もまだまだ盛んなものだ。「あれ、あの花は…」などと三々五々、半夏生の群咲く所で一休み。

みごとな緑と白の葉が盛りの半夏生で、皆つくづく眺めている。良い句が出来ないかな、という風情。その向こうにはつやつやした河骨の花は水面より花茎を高くつきだして独り立ち堂々と咲いている。

半夏生一休みするベンチ前

善恵

木栈道風通り抜く半夏生

陽子

河骨の葉の艶やかや花一輪

京子

広場に遊ぶ子供たちを見ながら湿生植物園に入っていく。子どもたちは何かを釣ろうと手作りの竿を垂らして騒いでいる。先生もいる。ザリガニ釣りだった。あちらの方ではザリガニの鉢が一つも上げてしまった、と騒いでいる。

ザリガニは外来種が持ち込まれたのだが、魚を食べるなど害をなすので駆除しているという。子どもが釣ったものは入口のザリガニポストに入れて帰る決まりだそうだ。

いろいろの花が咲いている。名前を知らない花も多い。樹木の種類も多いが、そのそれぞれに案内札があつてこれは良く分かる。しかし、名前を分かることよりも良く

鑑賞することが大切だ、と話しながら進む。

あるなしの風にも揺るる釣舟草

正規

夢にても揺られてみたき釣舟草

周二

木道を行くと田が一枚作られていた。水もたつぷりと張られて稲が元気に伸びている。更に行くとしラカシの林、芝生の大きい広場がある。この辺が古代の住宅遺跡の埋まっている場所である。六十軒余の集落だそうだ。

森巡り中に一枚青田かな

素山

七月の青濃き丘の抱く遺跡

文彦

巡っていると蝉の声が聞こえてきた。誰かが、今年初めて蝉の声だという。そういえばそうか。栃の木には丸い実がみごとについている。栃の実が古代の食物だったな、などと思う。

初蝉を聞きてはじける峽の徑

さち子

ひとつぶのどんぐり過去を物語る

由利

高台の広場に立って眺めると、緑の中に住宅が続く地域も広いが、遠くを電車が走る音が聞こえ、木立も随分多い。すぐ足下には里山風景が広がる。そろそろ行きましょう、ということでも昼食兼句会の場所、「華屋与兵衛」へ。

句会はいつものように囁目三句。見どころの多い花と森の公園にふさわしく、皆それぞれに句の対象としたもの、目の付け所がいろいろ面白く思った。

そして、講評では「半夏生という言葉は花と季節との区別に留意」などのお話もあり、なるほどと頷きながら解散となった。

■かさね吟行会■

日時 九月九日(金)

場所 岩崎邸 不忍池周辺

集合 千代田線 湯島駅改札口

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』(五三) 丸山酔宵子

『梅雨の晴れ間の温泉と酒三昧』

今年の6月は日本全国、すっぱりと梅雨に覆われたが、その合間には梅雨の晴れ間が真夏の太陽を輝かせていた。そんな6月中旬に1年前からのそれぞれの計画と偶然が重なり、10日間に渡って熱海、箱根、花巻、軽井沢と日本縦断温泉巡りとなったのである。

初日は熱海老舗高級旅館「石亭」横の古い温泉付ききりゾートマンションで、熱海湾を見下ろし、毎月恒例の熱海湾花火を見ながらの至福のひと風呂。翌日は、我が「菘句会」の吟行で、宗匠である中原道夫先生(※)の特別な計らいで、予約すらなかなか出来ない岩崎小彌太男爵の別邸である憧れの箱根芦ノ湖畔「山のホテル」。美しいツツジとシャクゲ、そして富士を臨むホテルの贅沢な

温泉とフランス料理(ヴェル・ボワ)、まさに極上のサービスを堪能。全て超一流であり、感嘆、感激の極み。

次は大学時代の同級生との年に一回の温泉旅行で、一路東北新幹線で宮沢賢治ゆかりの花巻温泉へ。前日とは打って変わって、じめじめと鬱陶しい梅雨そのもの。花巻温泉の「ホテル志戸平」は1500人収容。豊沢川を眺めながらの豪快な露天風呂をはじめ、3つの源泉と20種類のお風呂があり、岩手県最大の容積を誇っている。久々の同級生との湯上りの痛飲は深夜まで続く。二日酔いで朝風呂と朝食でのビールの美味しさは格別であるが、年齢のせい気怠(けだる)さが残り、毛越寺(もつうじ)、中尊寺・金色堂は朦朧と惰性の世界。

芭蕉が、藤原三代の栄華の儂さと義経の最期を偲びみじくも詠んだ、「夏草や兵どもが夢の跡」そして、中尊寺を訪れて、「五月雨の 降り残してや光堂」これらの句は、江戸・深川を出発してから44日目とのこと。我が俳聖芭蕉の素晴らしさをつくづく再認識したのである

が、我ら熟年老年？吞兵衛は、只管飲み続け、て昼食時の蕎麦屋では、来年の再会を期しての一献、二献、三献：と節度ない酒宴が延々と続く。

翌日は我が人生最悪な二日酔いで、梅雨の晴れ間のギリギリした太陽が目染みる。恐る恐る細心の注意を払いながら、関越自動車道をひた走り、浅間山の麓のログハウスへ。ログハウスに外気を通すと高原の爽やかな風が吹き抜ける。いざ今日の温泉はと、軽井沢の「千ヶ滝温泉」へ。熊が出てきてもおかしくないような、木立の間にできた大きな露天風呂には、青々とした新緑の木立に真っ赤なツツジが露天風呂を囲み、酒浸りになったぼろぼろの体と怠惰な心を癒してくれる。

新緑の露天に浸り 只管に

酔宵子

※中原道夫先生…卓抜な機知を駆使し、21世紀の風狂の俳諧師と呼ばれる。代表句に白魚のさかなたること略しけり」「瀧壺に瀧活。けてある眺めかな」などがある。

本からのあれこれ (10) 米田文彦

「囃し言葉」

郡上踊りである。清流とお城のある町、郡上八幡。

その踊りもいろいろあるが、一番有名でわかりやすいのは情緒あふれる「かわさき」

郡上のなあ 八幡出てゆくときは 雨も降らぬに

袖しぼる 袖しぼる (ああソレンセ)、

会社の先輩が酒を飲みながら初めて歌ってくれたとき、「ここで囃し言葉が入るんだが、君は知つとるか? ああソレンセというんじゃ」と上機嫌で言っていたことを思い出す。

そして早いテンポで楽しい「春駒」

(七両三分の春駒春駒) 郡上は馬どこ あの磨墨の名馬出したる気比の里、金の髻標は馬術の誉れ、

踊りは下駄を地面に打ち鳴らしながら進んでゆく。

腰に大きな瓢箪を吊り下げて上手に踊っている人がいたり、周りを見ながら真似している私たちがいたり、い

ろいだった。

七両三分の春駒春駒は馬市で自分の馬に良い値がついて喜んでいる歌詞なのかと思うのだが、軽快でなかなか調子のよいリズムだ。

海外ミステリーに入れ込んだ時期がある。いろいろなジャンルでそれぞれの魅力的な探偵たちが活躍するわけだが、いま書棚にあるミステリーはそれほど多くはない。そもそもなるべく図書館で借りて読んできたせいもあるが、残っているのはアガサ・クリステイの数冊とレジナルド・ヒルのダルジール警視もの、マイクル・Z・リューインのパウダー警部補ものぐらいになっている。

ミステリーの探偵という人物は魅力的なキャラクターの持ち主として書かれているのはご承知の通りだ。平凡でつまらぬ主人公の話では面白いわけがない。

それにしてもダルジールもパウダーもなかなかの個性の持ち主なのだ。

ダルジールはイギリス・ヨークシャー警察に所属、太ちよの大食漢、酒飲み、無神経、しかし実は繊細で誠実、そしてやはり無神経で厚かましいという男。優秀な部下

のパスコーと事件に当たっていく。

パウダーはアメリカ・インディアナポリス市警の万年夜勤専門刑事、配置換えされて失踪人課の課長。

毎日押し寄せてくる雑多な仕事、捜索依頼、失踪か殺人か分からない案件、そして息子の素行にも頭を悩ませつつ仕事と事件に突っ込んでいく。

その頃の私は、ダルジールには自分とまったく違う性格に異次元を求め、パウダーには会社での仕事と、妻子とともに日常の諸々と戦う生活に圧倒される中で背中を叩かれ励まされていたのだと思う。

そして、アガサ・クリステイの名探偵ポワロと暖かい人柄のおばあさん探偵ミス・マーブル。

テレビのクリステイ特集番組で知ったことだが、クリステイは小説を書き進めつつ犯人を誰にするか考えていったという。つまり、初めに犯人を設定して筋を作っていくのではなく、登場人物たちの動きの中から犯人を決めていくことがあったという。そんなことで破綻しないのか、流石にクリステイという感じもあり、そういうこともあったという程度のことなのではないかとも思

うが、どうなのだろうか。いちばん驚いたのは「そして誰もいなくなった」。

孤島に十人の関係ある人たちが集まることになり、ひとりづつ殺されていく。誰もいなくなるのだから最後に残る一人が犯人で自殺するんだろう、と思っていたら十人目も殺人事件だった。島に人はいなくなった。では犯人は誰か？

クリステイの、ミステリーではない小説「春にして君を離れ」は特別な小説で深く考えさせられたものだが、残る紙数も足らずここでは省略とする。

私は、時々自分を鼓舞したいときなどに「七両三分の春駒春駒」とリズム良く口走っていることがある。

また、自分の気持ちに自分がくたびれてしまったときとでも言おうか、あれやこれやにくたびれてぐたつとしたいとき、「ああもう、ダルジール」と呟いて横になっってしまうことがある。

口走っている言葉、呟いている言葉に意味がある訳ではない。それだけのことである。

ある自然科学者の手記 (51) 大橋望彦

『生・若・老・死』

24) 「伊豆の植物採集旅行」

東大農学部林学科倉田助教(既に故人となられたが後に東大農学部林学科の主任教授で活躍された)を丸さんと一緒に訪ねて、先生方の「伊豆天城方面の植物調査」に同行することをお願いし許可された。同行に当時大学院生の蔵(寺?)本さん(申し訳ないがお名前がはつきりと思いつけないが、このようなお名前だったように思う)が一緒だった。

伊豆の修善寺から営林署のトラックの荷台に載せて貰い、凹凸道を土埃を上げながら走った。手拭で頬被りしたが、埃は容赦なく我々を覆った。湯ヶ島を過ぎて、暫く行った所に静岡県の山葵試験場があった。水温が約10℃で二定している、山葵の生育に、大変適しているため、この辺の谷間は殆んど山葵沢として開発されているという説明があった。

更に山道に入り暫く車に揺られていくと、少し開けた場所に出た。この下の方に「淨連の滝」という立派な滝がある。其処に面白いものがあるので行ってみようと、倉田先生はさつ

さと先頭切つて、急な坂を降りて行かれた。滝壺の横まで行くと、飛沫が舞っていて、涼しい気流の渦の中に入ったようであった。すると倉田先生が指をさして「あそこにある羊歯が見えるだろうか?」と言われた。滝の裏側にある岩肌、比較的大きい、約60〜70cmはあるだろうか、羊歯が滝壺の方に向かって伸びていた。その先端部に細い30cm程の葉柄みたいなものが付いていて、更にその先には、直径1cm程の珍珠球みたいなものが付着していた。倉田先生の説明では、この羊歯は極めて珍しい種類で、天然記念物に指定されている。羊歯の先端にある玉の中には胞子が入っていて、羊歯が成長し、葉柄の先端の重さで玉の部分が地に着くと、其処から根が生え出して固着し、新しい羊歯が芽生えてくるのだ。したがって、この羊歯のことを「子持ち羊歯」と名付けられている。ということだった。倉田先生は、日本きつでの「羊歯類の権威者」だったのである。一週間足らずの植物採集であったが、この間に採取した羊歯類は50種を悠に越していた。

天城峠の少し手前まで休み無しに走った。宿舎は営林署の大谷伐木事務所の道場であった。ドラム缶の風呂で一日の汗を落とし、食事を終えたら直ぐに明日に備え床に就いた。

朝五時に、直ぐ横にあった大太鼓が「ドーン、ドーン、ドドド、ドーン」と打ち叩かれて、飛び起きてしまった。採集の行程のあらましのことを五万分の二の地図を元に説明され、支度に入った。学生服だったが、木綿の靴下にズボンを穿き、地下足袋を履いてからその上にゲートルを巻くといった、戦時中によく着ていた服装となった。学帽は暑いので、白いピケ帽が違つてはいた。それに植物採集用のブリキの大きな胴乱どうらんと、紙テープに鉛筆、軍手と麻紐、あとは事務所の方が作つて下さった握り飯を風呂敷に入れ、腰に巻いて準備が整つた。一日十里（40km）の行程で、それも険しい山道である。倉田先生は身軽にヒョイヒョイと歩いてゆかれる。種類の判らない植物は、兎も角先生に名前を教わり、テープに書き込む。その紙テープを植物に括くくつて胴乱に入れる。山道も樵きりの入る道で細く、下草もチャンとは刈つてなく、険しいところでは二本の丸太が並べてあるだけの恐ろしい場所も幾つかあつた。標高1034mの猫越岳ねここだけの東斜面は人が余り入り込めない原生林となつていて、植物の宝庫といえる。その原生林の中を縦横無尽に歩きまわると言つた感じで採集し続けた。途中で林道から外れて、道の無い藪をコギ渡り、ガレ道を足をとられながら進み、それでいて植物に対して目

が離せない状態で、迷子になつたら大変だと思つたりしながら先生の後を追つた。暗くなつて道場に帰ると、着替えることも後回しに、採集してきた胴乱からはみ出す位の植物の整理と、腊葉さくよう作りである。新聞紙の間に植物を綺麗に拵くげ、名前を書き込んだテープと共に挟んで積み重ねていく、最後にその挟んだ新聞紙を二枚の木の厚板で挟み、荷造りのうように麻紐でしっかりと縛つて仕上がりである。着物を着替えて、風呂に入り、食事をして、ぐっすりと寝る。翌日も十里の道を歩き回り、帰つてきてからまた腊葉作りである。昨日の腊葉を取り出し、画用紙に植物を貼り付け名前を書き込み、湿つた新聞紙を道場一杯に拵くげて乾かす。此処で、何で道場に泊まるかが、やっと納得したのである。その翌日は、先ず拵くがついていた新聞紙を集めてから、腊葉さくよう作りの仕事が始まるのである。一週間の採集で、不思議なことに一日の採集する植物の種類がぐんと減つていた。毎日の採集で、腊葉さくよう作りの内に同じ種類の植物の名前は、自然と覚えてしまつていたのである。これが倉田式の植物の名前の覚え方だったのである。それぞれの植物の特徴を實際に掴み、覚えるまで知らん顔して、何回でも名前を教えてください。全く頭の下がる思いであつた。

絹の話 (70)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の販売現場質問集

絹の販売現場にいるとお客様から色々な質問が来ます。多い順に列挙してみます。

洗濯はどうしたらよいですか？

野蚕絹の売場で品物を手にして、買ってみようかと興味が湧いて来た時、「絹は自分では洗濯出来ないよねー」と云う投げかけ質問が70%くらいです。

そこで、すかさず、「自分で30℃以下の温度の水で、もまずに、中性洗剤(洗髪用のシャンプーもよい)で押し洗い、強く絞らずタオルで水切りするくらいで、家蚕(世の中の殆どの絹)は陰干し(家蚕は直射日光で黄変する)、野蚕(白色エリ蚕を除く)は直射日光下でも可、地の目を揃えて干して下さい。綿の3倍の早さで乾きます」と答えます。すると、「水で洗えるの?」「洗濯表示にドライクリーニングと書いてあるではないですか!」と少しうさんくさい表情で聞き返されます。本当に水でそんなに簡単に洗えるなら買いますと云っている様なも

のですので、絹は5000年来つい最近の親の代まで水で洗って来た事、ドライクリーニングの黄変や毛羽立ち(安い取次店は顕著)、高料金のデメリットを1分以内で説明すると、「なるほど」と納得してくれます。

殆どの人が絹は自分では洗えないと思いついて、ドライクリーニングに出して黄変などの不測の結果に苦い経験をしている人が多くいます。

なかには手洗いは苦手で、どうしても洗濯機で自動乾燥までしたい人もいます。「ゆるい回転で、短時間ならよいですが、脱水は避けて下さい」「強い脱水をかける」と、絞りジワがアイロンしてもとれなくなる時がありま

す」と答えます。この話はなるべくお客様の絹認知度に合わせて出来るだけ短く話さないと、「そんなめんどくさい事は嫌だ」と購買意欲をさいてしまいます。季節を問わず「一度使ったら必ず洗濯しなければ気が済まない」と自分の清潔感を披露する人もいますが、絹は汚れ難く、雑菌の繁殖も防ぎますので、カシミアのストールを毎日洗う必要が無いと同様に、頻繁に洗濯の必要はないのです。

絹のドライクリーニング表示はいつ誰が決めたのでしょうか。この表示のために如何に多くの方が絹ばなれしてしまった事でしょうか、絹物を購入しても大事なじ

に仕舞込んで、実に多くの方々が使う時期を失ってしまい、死蔵しています。もったいない事ですし、絹による健康促進にも浴していません。

行政改革が声だかに叫ばれていた時代に、絹産業が目玉にされていましたが、昨今また絹産業振興策が検討される様になって来ました。絹の「ドライクリーニング表示義務」を撤廃しない限り、一般の絹回帰はあり得ないと思います。もう既に若い人には絹に対する憧れはなくなってしまっているようですけれども。

アイロンをどうかけたら良いですか？

この質問をする人は心の中で買う事をほぼ決めた方がします。この質問をする人の50%位の方が「低温のアイロンを生地に浮かせて掛けたが、生地がチジンだ、シワがよくのびなくて固くなってしまった」、「低温アイロンで当て布をしたが、元の様にならなかった」等の失敗談が続きます。

「絹のシワを延ばしには湿度が必要です。絹は140℃を超えなければ物性変化は起こりませんので、スチームアイロンを浮かせず、一般の物は当て布せず、アイロンの綿又は麻の温度で地の目に沿ってかけて下さい」と申します。ここで「そうなんですか！今まで間

違っていたのですね、やってみます」と意を強くする人が90%。「何だか今まで教わって来た事とは全く逆ではないですか」といぶかる人が5%位、聞いているうちに頭が混乱してしまい「そんなに小難しい事は嫌だ」とそれ以上話しを聞こうとしない人が5%位いらつしやいます。

以上の話を納得して購入して頂いたお客様も、殆どの方が再来の時、ストール一本アイロンせず着用して来られるのには閉口します。お化粧には念入りな時間を掛けているのに、身辺にももう少し配慮したお洒落をして頂きたく思うことしきりです。

やはりめんどうさいのですかね！

既製のスチームアイロンに設定されている絹の温度は低過ぎます。電気メーカーももう少し絹の物性研究をして頂きたいものです。自動車の燃費の問題等々騒がしいですが、アイロンの絹の低温表示も同じくらいの問題ではないでしょうか。未だに霧吹きアイロンの方もいらつしやいます。2000円も出せばスチームアイロンが買えますので、是非購入して頂きたいものです。

まだまだ色々な質問がありますので次回も順次ご紹介して行きます。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 六十回

「月虹」 鮫島 満

ているというのである。

このころの文字ぞよけれどたびまなく言ひましし君
の声よみがへる 同

目のまへに宙に指もて文字書ける大人を仰ぎし日も
はるかなり

茂吉の筆二本かたみと賜りて洗ふこともせず筆筒に
久し

一首目は先の「写生」の字を書いていたころ自ら繰り
返しその字を讀んでいたというのである。二首目は、茂
吉が歩きながら宙に指で字を書いているのを仰ぎ見たの
も昔のことになったというのである。

十七 鹿兒島寿蔵 4

大根はきほへりセイサイも鮮しき畠をすぎて茂吉記
念館 鹿兒島寿蔵 『花牙々』昭和四十三年

壁面に大き軸あり「写生」の二字きみの息吹のけだ
しこもれる

思ひいづるひとみな逝けりならべある手蹟墨のなほ
黒くして

題詞は「茂吉記念館成る」である。正式名称財団法人
斎藤茂吉記念館は、茂吉十三回忌を記念して昭和四十年
に山形県上ノ山市に建てられた。

二首目は茂吉の歌論の柱である「写生」を茂吉自身で
書いた軸を詠む。結句はその息吹が「写生」の字に確か
なものとしてこもっているという意味である。三首目の
上句五・七は「アララギ」の初期以来の茂吉の師や同士
である人々、伊藤左千夫、古泉千樫、島木赤彦、中村憲
吉、釈迺空といった歌人のことをいうのだろう。そのよ
うな寂しさはあるが茂吉の筆跡は今も黒々と精彩を保つ

愁眠の面持ありし先生の心のはかりがたきを思ひし

同

舌を出すくせありし君おもほえて吾が磁の鬼に舌を
出さしむ

君つひに土に入るともとほるべきころとほりてみ
ちびきたまふ

題詞に「青山墓地」とある。一首目は生前の茂吉は時
に愁いに沈んだような表情を見せたが、その心は他人で
ある自分には計り知ることはできなかつたというのであ

る。二首目は茂吉に赤い舌を無意識に出す癖があったのを思つて自作の焼き物の鬼に舌を出させたというのである。本誌前号に作者には「みづからの鼻さき舐めむばかりなる舌出人形の茂吉作らむか」という歌があることを紹介しておいた。三首目は、茂吉が地下の人になつてもその教えは消えることなく貫かれて自分たちを導き続けているという意味である。

地下足袋をはきて銀座のよひのみち歩む老君の夢浅かりき 同

茂吉は大戦中、山形県の金瓶、大石田に疎開しているあいだに地下足袋で散歩することを好むようになり、帰京後も自宅周辺では地下足袋で外出することがあった。右の一首は、老いた茂吉が銀座の街を歩くという、あり得ないことを夢にみたけれども直ぐに醒めたという意味である。

あかつきの講話終へたる赤彦を後光負へりと言ひぬ
茂吉は 『アプローチ』 昭和四十四
毛じらみになやむ茂吉をまざまざと思ひいでたり夏
の比叡に

題詞に「比叡山吟行」とあるが、これはアララギ短歌

会の比叡山で行われた安吾会での作であろう。安吾会は、僧が一定期間外出しないで一箇所修行する「安吾」を真似て歌の勉強をする会のことである。この年は大正十四年七月二十七日から八月二日にわたつて行われた。

一首目は「あかつきの講話」とあるから夜通し行つたか、早朝起きで行つたかであろう。島木赤彦の講話は貴重なものであつたらしく、茂吉が「後光負へり」と言つたのである。茂吉は約三年間のヨーロッパ留学を終えてこの年一月に帰国したばかりで、留守中の赤彦の統率に感謝していた。赤彦の短歌をも高く評価していた。作者は、茂吉の言葉を聞いて、赤彦門下として感激したのである。赤彦はこの翌年に死去する。

二首目は茂吉が毛じらみに刺されて苦しんだのが比叡山でのことなのかそれ以前のことなのかはつきりしないが、おそらく蚤やしらみに異常に反応する体質の茂吉のことだから比叡山でも夜ごと苦しんだのであろう。

駿河台に向ひて行くに残像のたちつつ鐵塔書院おもひいでたり 『練馬』 昭和四十六年

『短歌写生の説』上梓の日」と註がある。『短歌写生の説』は昭和四年に鐵塔書院から出され、のち昭和二十二年に佐藤佐太郎が設立した永言社（発行人佐藤志満）から発行された。

楽しい時間 46

山本紀久雄

2016年7月30日

一番美味しいカキはどこか？

世界の海で、一番美味しいカキはどこか？ と聞かれることが度々ある。加えて、日本ではどこですかとも……。

この質問への答えは難しい。理由は、日本国内ではカキを食べないことにしているからである。今まで、国内でカキを食べて何回もお腹を壊した経験がある。先日も、近所の方4人で居酒屋に行った際、私がカキに詳しいということ、カキが好きだ、と間違えて理解し、焼酎の水割りを飲んでゐるのに、私が知らない間に、生カキを注文してしまった。

突然、生カキが出て来たので、どこのカキか、とウェイターに尋ねると「オーストラリアです」と答える。しかし、有名な「シドニーロックオイスター」ではない。形状が大きすぎる。シドニーの波止場に面したところにフィッシュマーケットがあるが、そこでは朝から夕方までカキ剥きしている中年男性がいる。一日にどのくらいカキ剥きしたか覚えていられないというほど、「シドニーロックオイスター」に挑戦していて、剥き終わったものが写真であり、これをボックスに入れて売っている。居酒屋のカキは、一般的に、フィッシュオイスター、つまりマガキだが、ウェイターに、これ以上質問しないほうがよい。あまり蘊蓄を問うと「年寄りには理屈好きだ」と嫌がられる。

ところで、世界中で生カキを食べているが、お腹を壊さないた

めには、白ワインを飲むことしかないと確信している。必ず白ワインを二口飲んでから、生カキを食べるようにしている。だが、近所の方と行った居酒屋では、カキが出てくるとは思わなかったの、ビールを飲み、次に焼酎水割りを何杯も飲んだところに、生カキが出てきてしまった。

何となく嫌な予感がした通り、翌日はひどい下痢だった。しかし、この程度の下痢は問題ない。一日で回復する。本当にカキに当たった下痢はひどい。一週間程度は続くだろう。

では、白ワインは、どのような効用があるのか。赤ワインは動脈硬化を予防する効果があり、適量を飲んでいる人は、心筋梗塞などの虚血性心疾患や、脳梗塞の発症率が低いといわれている。さらに、ポリフェノールを構成する成分が癌予防になるともいう。

ところで、癌予防対策の健康本がたくさん出ているが、あまり信用しない方がよいと思っている。先日、地元の図書館で、たまたま手にした脾臓癌予防本、そこには酒を慎む、タバコは吸わない、適度なスポーツ、一日4杯のコーヒーを飲む等が書かれていた。筆者の知人は、このすべてに該当していたが、つまり、日頃から健康には留意し、人から「安全食生活の見本みたいな人」といわれていたが、脾臓がんを発症し、まだまだこれからという歳なのに亡くなってしまった。それ以来、健康本に書いてあることを信用しないことにしている。

しかし、生カキを食べる際に白ワインを飲むことは、自らの体験で「絶対の自信」を持つている。世界中のカキ養殖場で生カキを食べ、白ワインを飲んだ体験から保証する。

では、白ワインにはどのような効果があるのか。

白ワインは、大腸菌やサルモネラ菌に対して、非常に強い殺菌

効果があり、しかも、即効性がある。この殺菌効果は、白ワインに多く含まれている有機酸とアルコールとの相乗作用によるものと考えられている。

さらに、O157は大腸菌の一種なので、白ワインはO157にも十分殺菌効果があるといわれている。

加えて、骨粗鬆症対策には、カルシウムが有効であることは常識だが、実はカルシウムとともに、カルシウムの半分の量のマグネシウムも必要であることが分かっている。

白ワインには、ミネラル類が豊富に含まれているが、中でもカルシウムとマグネシウムの割合が2対1と、骨粗鬆症予防には理想的なバランスとなっている。(参照 世界週報 1999年6月15日 医学博士 田中清高)

NHK「妄想・ホン料理」ブラジルセルビア土手鍋編(2016年1月22日20時放映)に出演したときにも、世界ではこのカキが一番美味しいですかと質問された。

自分の体験では、ブラジル・グアラッパ湾のマンガローブカキ、クロアチア・マリン・ストン湾のカキ、オーストラリア・タスマニア島のリトル・スワンポートのカキ。



これがベストスリーであり、この三つの中では順位がつけられない。それぞれ、その海の味わいが異なり、特徴があつて、何が一番であるかという判断は難しい。

先日、自民党本部に行き、稲田政調会長にお会いした際、自己紹介を兼ねて「世界の牡蠣事情2005-2010」を呈呈したところ、同席していた政策秘書が、世界ではどこが美味しいですかと、やはり質問してきた。そこで、上記三か所を上げて、順位はつけられないが、いずれも一番美味しいと回答したら、カキ好きらしく、今後の話題にしたいと語っていた。

また、クロアチアに旅行するという女性から、同地ではカキが有名だそうです。と聞かれたので「世界の牡蠣事情2011-2013」を差し上げたところ、帰国してお土産にクロアチア産の赤ワインをいただいた。マリン・ストン湾には行かなかつたので、カキは食べなかつたと言っていたが、いただいた赤ワインは結構うまいと思いつつ、味わい評価感想を「ボルドーとブルゴーニュを混ぜたような感覚」と伝えると、妙な顔をしていたが、ボルドーの熟成感と渋み、ブルゴーニュのすっきりした酸味が混じっていると感じたので、そのように伝えたわけである。

この友人には、前号で紹介したイスラエルワインのGAMMAを差し上げたのだが、やはり「素晴らしい」と絶賛していた。クロアチアの赤ワインをイスラエルと比較すると、やはり、一段落ちるというのが正直な感想である。それほどイスラエル GAMMAは「The Wine」という感じで、欠点がないのが欠点というくらいだった。ただし、面白味が欠けるのもイスラエルの特徴だろうが、IT技術は米シリコンバレーとトップを競うほどのレベルで、経済産業省は今年20名の日本人起業家を、イスラエルへ勉強のため派遣することのこと。

楽しくマナー (15)

辻 照子

に小学生時代のひとこま。

「焼酎をアレンジ」

今回、試飲の焼酎の原材料は、さつま芋と米麴ですが、製造方法や麴（白・黒）によって味が違い、それぞれの特徴を楽しみます。

毎年、紫蘇が沢山採れるので紫蘇ジュースを作って焼酎とともにグラスに注ぐと、爽やかな色と香りで華やかな気分になります。

焼酎は、色々な素材と相性が良く順応しますので、さまざまなアレンジができます。

「小学生の頃、フランスでの学校経験を話すと、嫌な顔をされて。それからはその話には触れず目立たないようにしてた」と長女の真紀。今のようには海外旅行がメジャーでなく、遠い異国の事など小学生にとっては不思議な話でしたのでしよう。

真紀に云われるまで何年も知らずにいた私は、「子どもはゴムまり」というタイトルでエッセイを書き、親の都合で何度も転校をしても「子どもたちはゴムまりのよう順応性が有るから大丈夫、新しい学校生活を楽しんでる」と勝手に思い込んでいた頃の呑気な文章です。

真紀宛へ、小学生頃の友からきた年賀状（1995年）

（真紀ちゃんに会ったのは小学生4年の頃だったと思います。「フランスに住んでいて、フランス語が出来る転校生」を、皆ちよつと羨ましいナと感じていたと思います。私もそうでした。

私は特にそうでした。真紀ちゃんの自分で考えた事をきちんと発言する態度、人と違っていい、人と違うからいい、そういう考え方が出来る人を見たショックとあこがれと。

一度真紀ちゃんのお家にお邪魔した時、皆に笑顔でジュースを出して下さったお母さまも羨ましかったのです。

6年生で真紀ちゃんが転校して行った時、（真紀ちゃんが羨ましいな）そう思いながらでなく、いつかいろいろ話が見たい、という思いで年賀状を書いてまわりました。

人と比べないこと、人と一緒に過ごす時間のため精一杯頭と体を使うこと、毎年年



賀状を書きながら、今、もし真紀ちゃんと会ったらどんな話をするだろう、まだ、自分をつくって話をしてしまいたいかなあ〜と思ったりしました。今年は素直に聞けそうな気がしていました。今はこんな時、真紀ちゃんはどうするだろう、どう思うだろうとふと手を止めて考える事が多くなりました。

私宛の素直な文面に「そうだったのか」と。

フランスからポストン、フェニックスを回り帰国途中に寄ったハワイの浜辺で着てた真紀のハイビスカスのムウムウを、クルクル踊りながら夏祭りに行くと思ちたはしゃいでいる孫の傍らで、紫蘇ジュースに夏を感じながら、過ぎて行った日々を懐かしく思い出します。

*竹輪の梅和え

材料(4人分)

竹輪4本 梅干4粒 大葉4枚 ごま油適宜 白髪ネギ4cm分
作り方

①大葉は千切りにし水にさらし水気をしぼり、種を除いた梅干しとともに叩いて混ぜ合わせ、乱切りの竹輪と和え白髪ネギのをせごま油を回しかける。

*青梗菜と海老のとり炒め

材料(4人分)

青梗菜2株 海老16個位 人参1/2本 椎茸4枚 ごま油大2 ガラスープ適量 塩・胡椒少々 水溶性片栗粉適量

作り方

①青梗菜はざく切り、人参と椎茸は細切りにする。
②フライパンにごま油を入れ青梗菜の葉の部分以外の①と海老とを炒め水溶性ガラスープ入れ煮、青梗菜の葉を入れ塩・胡椒をし、水溶性片栗粉で好みのトロミをつける。

*豆腐ケーキ

材料(4〜6人分)

絹豆腐(充填) 300g ホットケーキミックス300g
g バター80g 砂糖80g 卵2個
作り方

①ボウルに卵と砂糖を入れ良く混ぜ、豆腐を加え塊がなくなるまで混ぜ、バターをレンジ(40秒位)加熱溶かし混ぜる。

②①にホットケーキミックスを入れ手早くゴムベラでさっくりと混ぜ合せ滑らかになったらマフィン型に入れ、トントんと空気を抜き、180℃に予熱したオーブンで20〜30分焼く。

「歴代天皇御製歌」(六十三)

貫名海屋資料館

「後花園天皇」第百二代・在位一四二八年(十歳)・一四六四年(四十六歳)

後花園天皇は、北朝第三代・崇光天皇の曾孫にあたる。この御世、第八代將軍・足利義政の時であり、太田道灌が(一四五七)江戸城を築いた。僧・雪舟が明から帰国する。

後花園天皇は、「般若心経」を書写して、天下の平安を祈られ、足利義政の奢侈を誡められ、皇太子(後の後土御門天皇)に教誡を寄せられた。

早苗　せき入れて水ゆたかなる小山田にはやりうちむれて早苗とるらし

夏草　日にそへていとゞ深くやなりぬらむ茂りのみゆく野辺の夏草

独述懐　思へたゞ空にひとつの日の本にまたたぐひなく生まれこし身を

後花園院御集・上巻

神祇　天地のその神代よりうごきなき我が日の本とまもるかしこさ

書　いつはりのなき世をみする文の道あふげばたかし人の言の葉

「歴代天皇御製歌」(六十四)

貫名海屋資料館

「後土御門天皇」第百三代・在位一四六四年(二十三歳)・一五〇〇年(五十九歳)

後土御門天皇は、後花園天皇の第一皇子。皇室の衰微は、はなはだしく、皇室領も「応仁の乱」に及び、地方の武家勢力に侵され、朝儀すら挙行出来ず、崩御されたあと、大葬も出来ず。

群雄割拠の戦国時代となる。義政は、銀閣寺を建造し、宋、元、明などと貿易の私利に余念がなかった。

窓虫 わが心くらきにつけて窓のうちに虫あつむる人ぞうれしき

祝 神代よりいまにたえせず伝へおく三種のたからまもらざらめや

(御土御門院五十首和歌)

雨中懐舊 静かなるこよひの雨に人はいさわれは寐られず思ふむかしを

寄山述懐 ともすれば道にまよへる位山うへなる身こそくるしかりけれ

伊勢 にごりゆく世を思ふにも五十鈴川すまばと神をなほたのむかな

目に見えぬモノ

夏目勝弘

目覚めた闇に手を伸ばし弄り、クルミの実を付けたスイッチの紐を引く、一瞬に闇が消えた。時間はいつも目覚める時刻。

電灯の明りで、闇の消えるのは部屋のみであるが、朝まで待てば闇は総て消える。

ふと、闇は有るのだろうか、無いのかと空な脳が動き出す。

考えてみれば、地球上にある、目に見えるモノ総てが、有つて無きモノばかりである。

有るモノが消え、どこに行つてしまふのだろうか、そして何も無い所からモノが生れてくる。また出現した闇に眠つてしまった。

尿意に目覚め起きたときが、いつもの起きる時間。そのまま台所に行き、テレビを付ける。この時間帯は、もう何回も見た放送が流れている。

テレビの電波も目には見えないが、各社の電波が飛び交つているが、混信しない。

どうしてこの地球上の三次元世界では、知らない事や、わからないことが起きてくる。

でもそれらは今まで当然とも思わず生きてきている。とりあえず自分の朝食を作ることにする。

水道には浄水器が付けてあるが、不純物をすべて取り除いているのだろうか、確かに浄化されているのだろうか。そしてこの浄化されているたろろ水から、水素水を作っている。水素は確しかに発生しているのだろうか。

目で見ても、味でも分からないが仕方がないので信じて使っている。

生活習慣病の文字を、テレビに新聞そして雑誌等で目にしない

日はない。

そこで毎日使っている食品三十余種の糖質、カロリーを調べてみようかと、書店に行く。食に関する本が幾種も幾つもの棚に並んでいる。

とりあえず「食品別糖質量ハンドブック」を買う。

毎日の食品の種類、量はだいたい決つているので、糖質とカロリーの数値を表にしてみた。カロリーは二日約千九百カロリー。糖質は百五十g。塩分は天然塩を使つているため調べなかった。

食品のカロリー、糖質、塩分量そのほかの栄養素などは、野菜、肉、魚類等々は目に見えないが、記載してある数値を信じるのみ。食事は食べるのが、生きることであるため、自分の食べるものは自分で作っている。

でもレトルト食品等は必要最小限と思つても、手軽さゆえ使つてしまう。買うときは裏の記載事項を見て買うことにしている。

今までは信じるより仕方がないと言うより当り前になつてしまつていた。

少し考えてみれば朝になれば、間違ひなく闇はなくなる。当り前だとも思わず朝を向えていた。今でも朝々まず太陽に手を合わせる人も居ると思う。

自分も素直に反省をし、感謝をし、謙虚に生きてゆかなければと思う。

梅雨も終りに近づいてきたのか、朝より雨が降り続けている。庭には小さな流れができ雨垂れの音がだんだん大きくなつてきた。

締切がこないうちに首でもと、雨の庭に向つている。今まで、ほんとうに「正しく」見ていたのだろうか「正しく見る」と言うことは、「白紙にして見る」白紙の状態から感じ取らなければならぬ。既成概念を捨てた白紙の状態で見そして感じ取る。

前途多難ではあるが、努力するしかない。

「氷魚」のことから (188) 岡本八千代

梅雨が明けて、庭の木槿ひまわりの白い花が五つ六つ咲いている。その手前の左側に私の六畳の籠り部屋がある。独りきりになる――。

子規は漱石のことを畏友おそゆうと書いて交際していた。友情とは何なのか？と探るうちにまず漱石の「木屑録ぼくせつろく」を読んでみようと思いついた私。

さいわいにも、漱石の復刻版の全巻が書棚にあるので、久しぶりに手にしてみた。

「木屑録 夏目漱石」と書いてある茶色の薄い箱に本体が入っていた。本体はまたボール紙で作った、濃い藍色の布製の箱包の中にあつたのである。その箱包にも左側の上の方に「木屑録」とあつた。その箱包を右と左に開けると、和綴の「木屑録」と左上に書いた本体そのものがあつた。色は草色淡く茶色がかつていた。和紙やわらかく、ほとんど漢文で仕上つていた。

文字の右の横や、文章の頭、つまり上の処には朱色の注書、注点があつてそれだけで美しいと私は感じた。これからはこの本を開くときは、白い手袋でもはめて開けるようにしなければ！と思うほどであつた。

漢文ばかりでは読めないと思つていたら、その本体を守るかのように「木屑録」解説小宮豊隆」「木屑録」訳文湯浅廉孫たかひらとある。その二冊がまた和綴であつた。

何かしら、この「木屑録」を開いたり閉じたりしているうちに神々しい物体に触れたりしているような感じになつてしまった。漱石という人は、自分の本の装丁にもかなり凝つた美しい上品な一冊としたものだとも思つた。

○「木屑録」とは？

・「木屑ぼくせつ」というのは、木の屑くず。木の木き葉は。つまらないものの意味。―があるらしい。

・この「木屑録」というのは、正岡子規に見せることを目的として書かれたものであつて、一種の手紙であつた。子規から返事がくる、二人の交流でもあり、子規に刺激されて書かれたものであつた。

○その刺激とは？

・子規が明治21年の夏（7月～9月）に、「無可むか有洲ゆうしゅう 七草集」というものを草したことにはじまつた。

・「七草集」なるものを、子規は、その知友間に回覧させたのであつた。しかも、その七草集を読んだ感想、批評などの返信を要求したのであつた。

・漱石は、子規の病状を知つていたので、それなのに「七草集」を草したことで、子規の文学に対する情熱、生き生きとした欲情的な生命体の姿を感じとつた。

漱石は、正岡子規を見舞つたり、書簡を出したりして。その交友はますます深まつていったようだ。次回は、先に七草集とは？に挑んでみたい。（河東碧桐著の「子規を語る」・和田茂樹編の「漱石・子規」を参考）

ことのはスケッチ (452) 今泉 由利

〔円空僧の和歌〕②

円空僧の出生地とされて伊吹山修験に全霊を注がれた。

○伊吹山法の泉の湧出る水汲玉の神かと思ふ (六一二)

○延宝七年(二六七九)、円空僧が天台宗の僧として資格を得た
歎びを、和歌に託して生母の霊に報告。

円空僧が仏縁を濃くしたのは、母に死別した時からと思われる。

○わが母の命に代る袈裟なれや法のみかげは万代をへん
〔八八〇〕

伊吹村観音堂十二面観音の背面に書かれている、高賀神社に残る「円空歌集」和歌。

○佳、おしなへて春にあふ身草木まで仏成る山桜哉 (九一五)
○さしもなくさあや野の里の錦木は今日打染る菊花哉 (九一六)

〔高賀山峯稚児権現 詠〕

かつて、子供達が浮板がわりに使つて遊んでいたと、表面がすり減っている円空仏がある。円空僧が、子供達の遊び相手になつていたと。

○奥山や小児の御峯の高ければ 雲のかけはし鶺鴒の音
〔一四三六〕

○手結ふ小児御宮の神なるか 七五三繩に書る玉房(一三八〇)

〔高賀山 詠〕

立上る天の御空の神成か 高賀山の王かと思念 (二一九六)
此や此おとろの山高賀山の峯晴て 照る月の形を見る哉 (二二五二)

〔瓢が岳 詠〕

時在は安く登るこの山路 福部嶽主なりけり (二二一〇)
世をのかれ空にのほりて在明の 福部の嶽に出る月哉 (五六八)

〔白山 詠〕

○現る越し御山神ならば 見る度事に喜ぞ増 (三四六)
○白山や越路の山の草枕 袖打払ふ雪かと思ふ (三五二)
○白ら山や州原立花引結ふ 三世の仏の玉かと思おもふ
〔二四四二〕

〔星宮神社 詠〕

星 祭る五門竜門玉なれや 今日より先は楽にけり (七四七)

〔下田 詠〕

下田なる袈裟祭るの粥も哉 あふ人の口かと思ふ (一四四七)
杉原熊野神社を詠んだ歌
草木も結へる神のあれはとぞ 千年にたる御宝の杉 (一三七二)
○チワヤフルたつかとそおもふ北の海只ひとすじにわたる渡日の本

〔一一六三〕

〔天台宗寺門派総本山三井寺〕

○三井寺書おくことの文なれや古も今もかわらざりけり〔八八二〕
〔延宝七年〕（二六七九年）

○三井の寺目出度法の車には万よ巻を積み重ぬらん〔七二五〕

○大比叡小比叡の峯をよそにして浦山敷も三井の寺哉

〔二〇〇四〕

〔大峯山 天台修験、真言修験、共同修業場〕

○昨日今日小篠山に降雪は年の終の神の形かも〔八八五〕

○大峯や天川に年をへて又くる春に花や見るらん〔八六七〕

○こけむしろしろうのいわや笹窟にしきのへて長夜のころのりのもし〔五七〇〕

〔天台の教え〕

○円成り頓き道だに有物を我心にぞうとまれぞする〔二二九二〕

○目をふさぎ月はいづくに在物を普く照す心もや見ん〔八六六〕

〔心〕詠〕

○心から覚まなべはよしと云う道のもうこしまでも事はかわらじ

○玉ならぬ心の月を手まに結むすべ世よに在明あきの仏成りけり

○よしあしものをのが心の閑しずかなる思ふ心に神ぞ守る〔二一四五〕

○法の道心の内の乱髪とかで此世を過しぬる哉〔六七二〕

○心から法のすがたはあるものを花の主の思い在せ〔一三四三〕

○とりとめよ心の玉の遊ぶらん万代までの美しき世に〔二四二五〕

○打蓋うちおほ三世の仏の母なれや糸いとすじも捨すやらぬよに〔五三三〕

○法の道御音を聞けばありがたや神諸共に明ほの空

○伝つたへ聞くころの内うちは唐からの春の遊あそびの花かと思ふ〔七七七〕

〔極楽浄土〕

○天地も清き御舟の池ならば法の蓮の世に浮ぶらん〔九〇〇〕

〔悟り得た〕

○樂しまん心と共に法の道月の京の花の遊か〔二二五六〕

○うれしさはなにつつまんけさの袖かかる袂はゆたかなりけり

〔六六〕

○古も今もちり行く花なれや嵐の風に世はまかせつつ〔七三六〕

〔円空の仏像造頭〕

○事もなきことを長く祈るなよいそぐ刃のひまお守るに

〔二五四〕

○飛神の劔のかけはひまもなし守る命はいそぎくくに〔二四四五〕

○作りおくこ此福このいの神なれや深山の奥の草木までもや〔七〇三二〕

○これや此くされる浮木とりあげて子守りの神と我はなすなり

○ちわやふる峯や深山の草木にも有あふ杉に御形移さん

〔五五九〕

〔結果は凡て「仏」にまかせる〕

○もろともに浮世の中は神なれや思う心に身は渡りつつ
〔七四九〕

○木にだにも御形みかたがうつす移うつすありがたや法の御音みこえは谷のひびきか
〔一三七八〕

○木に結三世の仏の形なれや心にかけてよ玉のたすきに〔三三九〕

○君が代は千世に八千世と祈まもらせ祷とせつ守玉へ四方の神々〔八〇五〕

○皇の神もうきよを思ふらんあまねく世代に守り在せ〔二〇八〕
人間観

○皇の浮世の人は玉なれや四方の宝の涌るかすかず〔七四六〕

○歡喜はいつも絶せぬ春なれや浮世の人を花とこそ見れ
〔一二六〇〕

○清み濁る世に浮草の絶えもせであまねく救ふ種をまきつつ
〔一二三五〕

○出いかば千々の鏡と成玉ふ幾万代に御形のごさん〔七九二〕

○おそろしや浮世の人はしらざらん普く照す御形再拜〔五七九〕

○作りおく神の御形の円まどかなる浮世を照すかがみ成けり
〔一三三二〕

○作りおく千々の御形の神なれや万代迄の法のかげかも
〔一四三〇〕

○幾度もたえても立つる法の道五十六億末の世までも〔三三二〕

○堂という止まる馬の足絶えていさみにかくる法の稿哉〔九七二〕

○やすやすと遊べる今日は春なれや道行旅の乗の馬哉

○万代に破れ袈裟の衣哉朝日さける花かとぞみる〔三三八六〕

○飛驒の国ふる初雪は花なれや心の内の春かとぞ思う〔三三六二〕

○八雲山神の社に降雨は法の御音の音計して〔一二三〇〕
○かみなりの空しかづかづなりつるは雲間に聞ふ法の音々

〔箱根〕

冬雲や箱根の関をへたつともあくる春には花とこそみれ〔五二二〕

〔武蔵野〕

○折つかとて武蔵の野への糸薄き袖ひ君がくるかも〔四三三〕

○冬のひは瀬々の戸さしのあざければ流れて深き江戸に住らん
〔四一〇〕

〔松島瑞巖寺〕

○松島や梳器の水を手向らん玉よりくるか結ぶかすく
〔四三六〕

○我宿の二重の梅の開くらん八重九重の花のとなり〔六八三〕

○しのぶらん濁に染ぬはちすのは八重九重の神の台か〔三四五〕

〔飛驒〕

○墨山塵もつもりて足びきの登りのばれば峯ぞ住吉〔二二六〕

○世に伝ふ歡喜ぶ神は我なれや口より出る玉のかつかつ〔七二九〕

〔法華經の聖語〕

「今此三界は悉く是れ我有なり、その中の衆生は皆是れ我子なり」

○硯にはたまるみかげのたへもせで其の心をば神ぞしるらん
〔二二三〕

〔円空の和歌とは〕

○御そへは大和言葉に和て予皇は万代までに〔九〇二〕

○御そへの作る文は皇の幾万代の神の為かも〔九〇四〕

歌を詠むことにより、神や仏の魂をやすらげ人間の願いも叶う
ものという信仰があった

○作りおく心の神の形ならぬ世にうつくしき玉の言のは

〔四八五〕

○唐の目出度字は形ながら大和言に歡喜ぞます〔四七九〕

〔高賀神社〕

円空漢詩は八首。

○発心持戒日鎖関 阿耨多羅三世神

棄捨此身豈末閑 菩提小室凡風身

○妙法円空前後客 天龍降雨福部嶽

尽之多少有青山 日月星辰万歳春

○貞享甲子三光春 待三千年来白鶴

重々雲霧天已垂 拳登峯嶽豈安身

○如伏活龍福部神 山王示現聞般若

暫時会遇一楼鐘 雲霧連々福部嶽

○登福部峯弥勒春 白衣童子与天神

時哉待我三千歳 初転法輪般若身

○千々万歳任春冬 待三千年福部峯
会一楼鐘神遯迹 梵音般若在天龍

☆閑株独坐福峯曉 仏法僧鳥聞一鳥

一鳥一声人在心 人心般若去丁々

〔空海作・後夜仏法僧鳥を聞く〕

☆閑林独坐草堂曉 三宝之声聞一鳥

一鳥有声人有心 声心雲水俱了了

○人天社稷祭神祇 甚盛蝗虫又不時

民若失心無以食 引裾階下実辛毗

寛永九年壬申歳生まれの円空にとり、元禄王五申歳は還暦の歌

〔歌集に〕

「賀ほそき世のミのは富ならで十ト云へは六八へにけり」

一般に入定するには千日が必要。穀絶ち、水絶ち。

〔円空が好んで書遺した歌〕

「いくたびも絶てもたつる三會の寺五十六億末の世までも」

関市池尻、長良川畔で入定の素懷を遂げた。

円空六四歳。

編集室だより【二〇一六年七月】

三河アララギ賞 岡本八千代様

墨すれば墨のおほひのかすかして久々におもふ墨くれし君を

いつしかにすりておきたる墨の海干あがりてをりまた水注ぐ

本当に長く、長い間を、「三河アララギ」をお導き
いただいています。岡本先生の独得な「言の葉」は、
豊かな情景と心地良いリズムをともなった「短歌」と
なります。いつまでも、先生のあとを追わせていただ
きます。

○千代田フィルハーモニー管弦楽団による「クラシック名曲コンサー
ト」に出かけた。「ファイガロの結婚」序曲(モーツァルト)。木星(ホ
ルスト)。「新世界より」(ドヴォルザーク)。ポルカ「雷鳴と電
光」(J・シユトラウス)。

小さな子供も一緒に楽しめるコンサートということに驚く。今
どきの子供達は、なんと恵まれていることか。「ランチョン」で
細かい泡の生ビールをいただく。良い日だった。

○東高根森林公園へ吟行。

春の花々から夏の花々が変わってゆくところ、何とも心地良い、
多摩丘陵の自然を、今に伝えているのです。

かつて多摩丘陵二帯に広がっていた白樺の深い森。天然記念物
に指定されている。湿生植物園では、木栈道をゆきながら、
昔ながらの田んぼでの米作りが見られます。

東高根遺跡。古代芝生広場の下に、弥生時代から古墳時代
の大きな集落が。発掘調査の後に、1mほど盛土して、県の
史跡指定遺跡を保存してある。その上には二面白詰草の白い
花。

○柳橋において最後まで料亭をつづけた「いな垣」の後の方が、
今に続ける年中行事「隅田川両国川開き」に出掛ける。

浅草橋・神田川川つぶち・屋形舟泊り・風にゆれる柳・料亭・
柳橋の欄干のレリーフ簀・神田川と隅田川の合流点・そして、
ルーサイトギャラリー内・旧市丸邸)において、川風に吹かれ
て生ビール。打ちたての蕎麦、「古今」の鶏弁当。スカイツリー
のあたりが近い。

○府中・国分寺辺り散策。

●馬場大門のケヤキ並木。源頼義・義家父子が寄進したという
国の天然記念物。年月をものがたり立ち去りがたい。

●大国魂神社。武蔵国の護り神として、出雲の大国主神と同神。
武蔵国を開き、人民に衣食住を教え、医療法、まじないの術、
縁結びの神。大化の改新により、武蔵総社となった。沢山の
神社が集まっているから、それぞれの神様の「阿・吽」の狛犬
達の可愛らしかったこと。狛犬「高麗犬」「胡麻犬」と朝鮮
から渡ってきたと。平安時代、左側に「獅子」右側に「二角
獣の狛犬」が併置された。いつしか「頭」とも「狛犬」となる。
武蔵国分寺跡・お鷹の道・真姿の池湧水群・野川…。武蔵野
の湧水は美味でした。

野菜の花 (3)

鈴木孝雄



○ オクラ

アオイ科 トロロアオイ属
アフリカ北東部、エチオピア原産
早朝にかけて咲き、昼には萎む
寒さに弱い
日本では一年草
粘り気があり、コレステロールを
減らす効果あり

オクラの花言葉は「恋によって身が細る」「恋の病」。由来ははっきりしないが、オクラの実が先細りと関係あるのだろうか。

写真では十分にお伝え出来ないが、透き通ったような淡黄色の花は繊細で実に美しい。1日で花はしぼんでしまうので、やはり美人薄命である。英語名は一般にOkraだが、英国ではLady's fingersと言われる。形と優美さがご婦人の手を思わせることから命名された。米国ではルイジアナ料理の代表格であるGumboがオクラ名でもある。

「オクラの花」と「花オクラ」は違うってご存知ですか?幕末期、日本に渡来したのは中国が原産のトロロアオイ（黄蜀葵）で根から採れる粘液がネリとして和紙作りなどに利用された。このトロロアオイが「花オクラ」である。花は「オクラの花」より大きく、現在ではEdible flowerとして人気が高まっている。

もちろん、通常のオクラの花も食べられる。まずは体験と、畑のオクラの花を採ってきて写真のように5弁を水に晒し、試食してみた。シャキッとした食感が良い。噛んでいると次第に粘り気が出て、まさにオクラと変わらない。Cookpad推奨のワサビ醤油をつけて食べると、これはいける。

オクラの原産地はアフリカ。今では全世界の温暖地で栽培されるようになった。日本で急速に普及したのは昭和50年台になってから。料理が和洋中と幅広く、栄養価が高い。ネバネバ、βカロテン、カリウム、カルシウムなど夏バテ予防には最良だ。

今回は、デイルの花の予定です。

お知らせ

△十月号の原稿は、八月三十一日（水）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月原稿の返却・希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美